

前田圭介 「Wishing Well」 安部良 / architects atelier ryō abe 名和研二 / なわけんジム (本誌1109)

オルタナティブな価値観を許容する環境

社会背景に伴う家族像の変化によって、住むための器も大きく変遷している。9月号の作品の中でユニークな家族構成をもつ住宅に目が留まった。「Wishing Well」である。家族構成は2〜9人とあり、解説にはふたりの作家の住宅兼スタジオとアシスタントたちの仕事場と宿泊スペースを併せもつ建築とある。また、制度上の家族でもなく血縁の関係もない特別な世界観を共有する代替家族に相応しい環境を模索したともある。ますます家族構成と敷地全体でとらえている空間構成に興味をもち「Wishing Well」を訪ねた。実際訪れるまで、ふたりの作家とはてつきりご夫婦に近い関係だと思っていたので、ふたりのプライベートな領域とスタジオのパブリックな領域との空間構成が重要な要素になっていると思っていた。しかし、訪ねてはじめてそのような関係ではない、ふたりの作家同士であることを知る。なるほど代替家族に相応しい環境を模索する意味をようやく理解し、設計プロセスについて安部さんに伺った。印象的だったのは施主の要望として「スタジオの空気感を大切にしたい」という言葉であった。それは、スタジオだけに限らず作家の住まいの領域からアシスタントの宿泊スペース

まで建築全体の採光や通風・音、そして人の気配など環境の状態のことであるだろう。つまり個々のプライバシーとパブリックという繊細な距離感が何よりもここでは重要な要素であり、実際に各諸室のつながりのスタディの繰り返しに膨大な時間を費やしている。

その微妙な距離感
は住宅内部の人と

人とのつながりと、敷地全体から社会への距離の取り方まで及んでいるように感じられた。それは建築の四隅を削ぐことによって生まれた緩衝帯と、敷地を隔てていた塀とを巧みに利用した植物のカーテンなどによって、建築と一体となるランドスケープのような囲いから始まる。この敷地を覆う囲いから居室の外壁、そして吹き抜けを隔てる内壁へと、重層的に3つのレイヤーを介して緩やかに社会と接続する距離感が生成されている。外観のスタティックな印象から一変して、陽光に満たされた内部に広がる三次元に屈折するダイナミックな空間は、身体の移動に伴い居場所同士の関係性が加速度的に変容し、収束することなく複雑に絡みあう都市のような様相だ。即物的にも見える斜材や柱、素材や色の違いによって複雑な多面体の広がりは、緩やかに各領域を規定しながらパブリックな部分とプライバシーの部分とを微妙な距離感で混在させている。



2階から吹抜けを見る前田さん(左奥)と安部さん(中手前)。

特記なき撮影：本誌編集部

この都市のような状態がオルタナティブな価値観を許容する居場所として機能し、不即不離の関係性として程よく成立している要素なのだと感じた。そもそも、核家族という形態は近代に入ってからのものであり、かつての世帯にはさまざまな非血縁関係者を含めた集団を家族と呼んでいたことを考えると、代替家族というよりは、これもまた現代の家族のひとつとしてとらえるのが普通なのかもしれない。

「Wishing Well」は現代の多様な家族像から導かれるひとつの環境を示唆しているようで、とても興味深い住宅であった。

(まえだ・けいすけ / 建築家)



スタジオ。フロアレベルを下げて視線をコントロールしつつ開放性も確保している。
撮影：新建築社写真部



2階食堂からスタジオを見下ろすおふたり。